創立1880年
東京YMCA
2014 3 月号
発行所　公益財団法人東京ＹＭＣＡ　発行人　廣田光司
135-0016　東京都江東区東陽2-2-20　電話　03-3615-5562
URL http://tokyo.ymca.or.jp

東京ＹＭＣＡの使命
東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

We build strong kids, strong families, strong communities.　ＹＭＣＡは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

東日本大震災３年

復興への支援続ける

３・１１から３年。今なお家族や大切な人を失った悲しみの中にある方、震災後の生活に困難や不安を抱えていらっしゃる方々に心からお見舞いを申し上げます。

郡山市で開催している「屋内子どもプログラム」

東京ＹＭＣＡは被災地の方々の心に寄り添うことを大切にしながら、３年にわたり支援活動を続けてまいりました。避難所等への物資搬送や泥かきワークなどの緊急支援活動に始まり、被災地が落ち着きを取り戻し始めてからは、仮設住宅のコミュニティーづくりのお手伝い、子どもたちの遊びや学習の支援など、変化する状況に対応した活動を展開してまいりました。ＹＭＣＡのマンパワーが総合的に生かされ、ユースボランティアや専門学校生などの若い活力は、体力を必要とするワークにおいて発揮されただけでなく、被災した子どもたちの心をつかみ、家族や学校の先生とは違う役割を果たしてくれました。シニア層のボランティアは、仮設住宅やグループホームなどにおける歌の広場や花壇づくりなどにおいて、豊かな人生経験を持って温かく励ましてくださいました。

石巻で手料理をふるまう台湾の若者たち。（13年夏STTプログラム）

一方現地に足を運ぶことだけが支援ではなく、募金や物資援助を通して、実に多くのＹＭＣＡに連なる人々、またこれまでＹＭＣＡに縁のなかった方々も、私たちの支援活動に加わってくださいました。またＹＭＣＡの願いに賛同してくださった企業や団体も多数ありました。福島の子どもたちを招待し好評をいただいている「リフレッシュキャンプ」も企業スポンサーや社員ボランティアの熱意がなければ実現しなかったでしょう。

→学校の長期休暇中に行なっている学習支援活動。（石巻支援センター）

活動を通して出会った被災者の方々の多くが、私たちの支援を歓迎し、受入れてくださいました。中にはＹＭＣＡの趣旨に賛同し会員になってくださった方もいらっしゃいます。一方で被災した方にしかわかりえない心の領域、一人一人異なる悩みや課題もあるでしょう。それに対して私たちは謙虚でなければなりません。私たちの活動の成果を過信することなく、しかし困難な状況にある人々とともにあろうとし、いのちを守るＹＭＣＡの使命に適うものとして、今後も復興支援活動を力強く進めてまいります。

２０１４年度を迎えます。次年度もＹＭＣＡの特性を生かしたアクションを続けていくことが会員部の復興支援タスクチームの中でも確認されました。引き続き石巻支援センターに拠点を置き、仙台ＹＭＣＡとも連携しながら、歌の広場、ワークキャンプ、子ども遊び場づくり、プール開放のお手伝い、そして震災後ニーズが高くなっている学童保育の支援も積極的に進めてまいります。そして福島の子ども達と家族に対しては、保養キャンプなど、身体を動かしながら心も開放するプログラムを進めます。またＹＭＣＡの世界的なネットワークを生かし、海外のユースにもこの災害について知ってもらい、国内外のユースの成長をはかる交流プログラムも計画したいと考えています。

皆さんの物心両面のご支援が、被災地の方々の生きる力と希望に繋がります。引き続きＹＭＣＡの復興支援活動にご関心とご協力をいただきますようにお願い申し上げます。

（会員事務局　戸坂昇子）

よく生きる　よく老いる

日野原重明先生（聖路加国際メディカルセンター理事長）講演

1911（明治44）年10月4日、山口県生まれ。京都帝国大学医学部卒業、同大学院修了。1941年聖路加国際病院に内科医として赴任。2005年文化勲章受章。2007年日本ユニセフ協会大使に就任。著書は、『生き方上手』（ユーリーグ出版）ほか約300冊におよぶ。現在は一般財団法人聖路加国際メディカルセンター理事長。公益財団法人東京ＹＭＣＡアドバイザー。

１０２歳を迎えて

日野原重明先生が1月10日、第663回目となる東京ＹＭＣＡ午餐会で「１０２歳を迎えて」と題して講演されました。会場の学士会館には１２０人が集い、その明るく活き活きとしたお話に聞き入りました。

また先生と親交のあるピアニスト武藤聡子さんも駆けつけ、素敵な演奏を聴かせてくださいました。

私は年に１００回以上講演をしていますが、今まで座って話したことは１回もありませんので、今日も、皆様は座ったまま、私は立ったまま講演をすることになります。（笑）

今の私の目標は東京オリンピックです。２０２０年には１０９歳になりますが、聖路加国際病院は、選手の健康管理などを引き受けることになっていますので、理事長が倒れるわけにいきません。

ＹＭＣＡと出会い、東京へ

東京ＹＭＣＡと私は非常に深い関係があるんですよ。京都大学医学部の学生だったときに、日本ＹＭＣＡ同盟総主事の齊藤惣一先生から、「日野原君、箱根の山を越えて東京に来たらどうか」と声をかけられて、私は聖路加国際病院に赴任したのです。京都大学には、地塩寮（ちえんりょう）という学生ＹＭＣＡの寮があり、毎月さまざまな専門家を招いて昼食会を開くなどの活動をしていました。私はその寮で生活していた関係から、齊藤先生にお会いしました。それまで私は、京都大学の教授になることが目標でした。しかし、齊藤先生と非常に親しかった聖路加国際病院の内科医長の池田先生が、若手の心臓専門医を探しておられると聞き、東京へきたのです。

特別ゲストとして、ピアニストの武藤聡子さんが演奏くださった。武藤さんは、国立音楽大学ピアノ科卒業後、ウィーン国立音楽大学を最優秀で卒業。ウィーンと日本を舞台に活躍されている。20年前からアルツハイマー病の母を在宅介護する。その母との歩みを綴ったブックレット付きのＣＤをリリース。東京ＹＭＣＡ武蔵野ブランチのリーダーＯＢでもある。

病から得たもの　音楽の恵み

私は大学1年生のときに肺結核を患いました。当時は治療法もなく、死病と恐れられていた時代です。絶対安静を命ぜられた私は、大学を休学して京都を離れ、父が院長を務めていた広島女学院というミッションスクールの院長館で、家族の看病を受けながら過ごしました。８ヶ月間も高熱が続き、立ち上がることもできず、非常に辛い生活でした。そんな中で何とか精神的に、気持ちを立て直したいと思ったとき、妹が蓄音機をもってきて音楽を聴かせてくれました。

私はそのうちに、自分でメロディーを楽譜に書きたいと思い、作曲をしました。このときのノクターンという曲は今、私の作詩作曲集としてＣＤに収められています。

私は10歳のときにピアノを習っていたのです。10歳のとき私は腎臓病にかかって３ヶ月間学校を休み、その後も1年間は一切の運動をさせてもらえませんでした。その様子を見かねた母が、「重明、アメリカから来た宣教師でピアニストがいるから、ピアノを習いなさい」といって、私はピアノを習ったわけです。

そのときのピアノの教え方は、手の甲にコインやりんごなどを置いて、これが落ちないようにして弾く。落ちると、先生にバーンと手をたたかれる。そういう厳しい奏法で4年間習い、先生がアメリカに帰られた後は自分で勉強して、ショパンやベートーベン、中でもドビュッシーの「月の光」が好きで弾きました。

病気をしたことで、私はものを失ったかと思ったんですが、そうではなくて、病気になったからピアノが習えたということですね。

これはキリスト教のいい方をすれば、神様の恩寵です。恩寵というのはグレース。恵みです。神様のお恵みで得られたということを感じるようになって、私はキリスト教の信仰をずっと続けてきたわけです。

―――

京都大学にいたときは、近くのメソジスト教会に通っていたんですが、その教会の聖歌隊はレベルが非常に高くて、独唱ができるような方がたくさんおられました。その聖歌隊がフォーレのレクイエムの演奏会をやったとき、私は指揮をさせていただいたのです。その感激といったらこの上なく、私は自分が死ぬときにはフォーレのレクイエムを聴くと決めています。天国の門が開くときに遅れないように、自分でサインを出そうなんて冗談をいってます。そういうようなことで音楽は、私の生涯と関係があるわけであります。

喜ばしい老人になる

さて、私は90歳のとき、「新老人の会」という会をつくりました。老人にしかできないこと、老人だからできることを、老人の使命として、老人の手で実現させようという運動です。政府は、75歳以上の老人を後期高齢者と言いますが、あまり良い言い方とは思いません。私は、75歳をどうよく越えるか、その越え方を勉強することができれば、本当に喜ばしい老人になれると考えています。英語の〝エルダー〟という言葉には、年をとったということだけでなく、「先輩」「尊敬する」という意味があります。（▼2面へ続く）

赤▽三角

東京ＹＭＣＡの歴史を紐解くと、英語専門学校の前身である「青年夜学校」など先駆的な事業が生み出されているが、一方その時代の青年のニーズに対応しようと様々な働きを行なっている。人生相談、法律相談、就職相談、食費恵与、宿泊紹介、また行政から助成を受けて麻薬中毒救護などもしている。会員らの協力も多いにあった。その積み重ねの上に勤労青年対象の学校があったのだろう。▼ＮＰＯ法人北九州ホームレス支援機構の理事長で牧師の奥田知志氏は、『「助けて」と言える国へ』（集英社新書）の中で言う。今や「助けて」と言わせない社会となっている。自己責任と安心安全志向により、無縁社会が深く進行している。絆ブームも一体感だけ煽るものでは、「無縁」の壁は壊せない。絆は、寄り添い、痛みを聴く。しかし、綺麗ごとではなく、自ら傷つくこともある。それを覚悟で引き受けていくことと言う。▼ＹＭＣＡ使命の起点は、イエス・キリストが貧しき者、追いやられた者に寄り添い「生きてて良い。生きることができる」と語りかけたことではないか。▼時代も運営規模も違うが、小さくとも「助けて」に応える「受援型」のプロジェクトがあることが、新たな道や支援者を形作ることにもなる。「無縁」はすでに青年層にも及び、子どもの貧困も取り上げられる。耳を澄まして聴き取りたい。

（副総主事　本田真也）

▼1面（日野原先生講演）より

「老」という漢字は、腰の曲がった姿をかたどったものであると同時に、長年培った知恵を示しており、尊敬の意味があります。

そこで私は、「新老人の会」という名称にしました。今、20歳から60歳までの「サポート会員」、60歳から75歳までの「ジュニア会員」、75歳以上の「シニア会員」合わせ、1万2500人が登録しています。

「新老人の会」は3つのモットーを掲げています。

1. 愛し愛されること
2. 創めること
3. 耐えること、です。

「創める」というのは、やったことのないことをやることです。マルチン・ブーバー（1878―1965）という哲学者は、「人は老いても、新しいことを創めることを忘れなければいつまでも若い」と言っています。

私は今年、字を書くことにしました。私の書道展が3月に三越でありますから見に来てください。そこで販売を受け付け、そのお金を「新老人の会」に寄附します。

また2年前から、インターネット交流サイトのフェイスブックも始めました。毎朝みなさんに、「おはようございます。今日はこういうふうな生き方をしましょう」などとご挨拶を書く。なかなか慣れないですが、嫁に手ほどきを受けてやっています。これを始めると人生観が変わりますよ。10歳の子どもでもやるんですから、皆さんもやってくださいね。

笹の葉のように耐え忍ぶ

「耐えること」とは、耐え忍ぶことです。冬、降り積もる雪の重みに、笹の葉が大きくたわんできますね。たわんでくるけど、春が近づいて雪が少しずつ融けると、これがすっと起きる。この、たわんで耐え忍ぶという体験が必要だということを私は確信しています。

どんな人にも辛いことがあります。あなた自身でなくても、会社の倒産、あるいは愛する身内が亡くなるなど。いろいろなことが起こるけれど、それに耐え忍ぶという体験が人間をつくるのには必要です。辛いこと、悲しいことを体験していなければ、本当に悲しんでいる人の支えになることもできないでしょう。

また、「愛し愛されること」も大切です。辛いことがあると、人はとかく自分が失ったものばかりを数え上げ、ますます苦悩に陥ります。そんなとき、ほんの少しでも他の人を思いやることができれば、不思議なことですが、小さな喜びや感謝を感じとる感覚が磨かれて、試練を耐えられるようになっていくものです。

いのちの大切さを伝える

「新老人の会」はもう一つ、子どもたちにいのちの大切さを伝えることを使命としています。

私は10日に1回、全国の小学校を回って、10歳の小学生に「いのちの授業」をしています。「いのちはどこにあるのでしょう?」と問いかけると大半の子どもたちが手を胸のあたりにあてます。でも心臓はポンプです。酸素や栄養をもっている血液を全身に送るポンプです。たしかに心臓が止まれば死んでしまいますが、心臓はいのちではない。そう言うと、子どもは非常に驚きますよ。

じゃ、いのちはどこにあるかというと、いのちというものは目で見ることはできない。触ることもできない。いのちは君たちが持っている時間です。そして自分が持っている時間を使うことが生きるということです、と話します。

子どもには少し難しくなるんですが、いのちは君たちが使える時間だから、大切にしましょう。そして、若いときは自分の時間をすべて自分のために使うことは一向に差し支えないけれども、大きくなったら、自分が持っている時間をだれかのために使うようなご奉仕をすべきだと話します。

私は1970年に偶然、日本航空の「よど号」ハイジャック事件に巻き込まれ、人質にとられました。福岡に行く予定が韓国の金浦空港に連れて行かれて4日間、非常に危ない、恐ろしい目に遭ったのです。無事に東京に帰ってきた瞬間、生きているのではなく、生かされていると実感しました。そして、再び与えられたこのいのちを人のために使おうと、自分のいのちの使い方をはっきり決めたのです。

YMCAは、ヤングメンズ クリスチャン アソシエーション。青年が、社会のために奉仕をする組織です。奉仕をするような生活をしていると、心が豊かになる、そして心が刷新して若くなっていきます。

皆さんにも、自分だけではなしに、子どもの未来をつくるようなことをぜひやっていただきたいと思うわけであります。

にもかかわらず明るく生きる

私は明日、岡山に行き、神谷美恵子さん（1914～1979）の生誕100年の記念会で講演をします。神谷さんは、津田塾大学を出て留学し、ギリシャ古典文学の研究をしていたのですが、転学して精神科医になりました。そして長島愛生園でハンセン病の患者や家族の指導をする中で「生きがいについて」（みすず書房）という本を書いておられます。

生きがいとは、ミッション、使命です。ミッションとは、神様への誓いです。自分の使命は何か。皆さん自身、今日のこの機会をとおして、もう一度自省していただければと思います。

誰にでも辛いことがあります。本当にいろいろな辛いことがありますよ。にもかかわらず明るく生きる。この「にもかかわらず」ということが必要なんです。いろいろなことがある中で、明るく生きていく。使命をもって生きていく。そういう生き方、生き方の質を、よく考えることが大切だと思います。

【会場からの質問】

―― 平和という観点から一言メッセージをお願いします。

―― 私は95歳のときに、「十歳の君たちへ ―九十五歳のわたしから」（冨山房インターナショナル）という本を出しました。英訳もされ、国内外の子どもから手紙がきますが、その一つ一つに私は返事を書きます。どんないのちもかけがえのないものであるという、そのことを一人ひとりが頭でなく心や身体で感じることが、平和への第一歩になると思うのです。

ぜひこの本を読んでいただいて、YMCAがもっと平和運動を、子どもにいのちの大切さを教えるということを、おやりになればいいのではないかと思います。

（文責・広報室）

山中湖90年募金に2600万円

協力者647人（法人含む）

山中湖センター90周年記念施設整備募金委員会委員長・評議員　山本　和

本館・メインホール・宿泊棟は、屋根をふき替え、外壁の防水塗装工事をしました。またキャビンの床とテラスのタイルも張り替え、見違えるほどに立派になりました。

東京YMCAでは、山中湖センターが開設90周年を迎えるに当たって、老朽化した施設の改修整備を行い、100周年に向けての活動のさらなる強化を図るため、2013年春から「山中湖90周年記念施設整備募金」を行いました。お陰様で多くの皆様の厚いご支援によって、目標額2250万円を約350万円上回る、2614万円の募金を2月末現在でいただきました。ご協力いただいた件数も647件と多数に上りました。募金委員長を務めさせていただいた立場から、厚く御礼申し上げます。

募金を進めて感じたことは、実に幅広い方々が熱い思いをもってご協力くださったということです。東京YMCAの会員や職員の皆さん、山中家族キャンプなどの参加者、障がい児キャンプへの参加者や保護者、ワイズメンズクラブやその会員からもご支援をいただきました。また、山中湖での社会貢献活動に社員ぐるみで参加し評価してくださった企業や法人からも、少なからずご協力をいただきました。個人としても、特別な思いを持ってチャリティーコンサートを開催してくださった方や、山中湖センターに実際に足を運び、コテージ外の手摺の修復やペンキ塗装の奉仕活動をしてくださったグループがおられました。これらの方々の協力姿勢が、共感を生んだということもあったと思います。

北京YMCAは、20年余パートナーシップ関係にあることから、100万円を持参くださいました。蔡葵（サイ・クァイ）会長（＝写真左）と東京YMCA総主事・廣田光司（写真右）。

このような幅広い支援は、山中湖センターにおけるYMCAの活動そのものが、多くの方々に評価され、今後についても期待されている証左である思います。今回の施設整備は、ご基本的な修復ですが、都心からのアクセスの良さ、湖畔に隣接した平坦な立地、ユネスコの世界遺産に登録された富士山の雄大な姿が眼前に展開する環境など、山中湖センターは、東京YMCAの「人を育てる」野外教育の拠点として、その使命を達成する「要」の施設であることに間違いありません。東京YMCAは広範な活動を展開していますが、山中湖センターは、その本来の使命をわかりやすく内外に発信し、持てる力を発揮することのできる貴重な財産であることを改めて認識させられました。

皆様のご協力に感謝し、ご報告します。

12月～2月末日までにご協力くださった方々

（アイウエオ順、敬称略）

相澤里左子　浅野　浩司
芦田　利男　阿部　宏之
阿部　恵　有川　勘一
安藤　興彦　五十嵐政枝
石丸　泰樹　磯貝　光子
磯田　昭平（故人）
井上　長保・泰子
今井哲哉・佳代・涼子・健太
伊藤　剛士　岩井　芳昭
岩田　久子　内田　祐司
江尻　明子　大石　靖子
大高　正子　大田　節子
太田　富雄・八千代・幸嗣
大野　富巨　岡田　浩一
岡田　牧子　小﨑　公平
小澤　弘恒　小野　実
小畑　貴裕　加藤　裕美
川村　憲三　北井恵美子
喜多　隆正　木村　卓司
木村　恵子
工藤　康宏
倉島　克佳
小松　康広
斎藤　希世
坂部　有美
佐々木　啓祐
塩山　泰史
庄司　君夫
菅原　成臣
鈴木　宏昌
鈴木　泰子
関　弥市
田嶋　柚葉
塚田　槇子
長野　詩織
中村　ひろ子
西村　賢次
萩島　勢津子
波多　尚子
鳩山　友里
花井　雅男
東尾　浩
廣田　光司
藤江喜美子
藤野　恒明
木村　利人
久保川　守
小沼　円
権藤　徳彦
齋藤　總衛
坂部　暁紀
佐山　玉枝
嶋田　恵子
白石　克人
杉林　聡
鈴木美奈子
諏訪　治邦
髙橋　久代
田中　博之
遠矢　良男
中村　孝誠
中元　美佳
西村　寿子
波多　啓造
鳩山　徹郎
林　延弘
平野　彩子
廣田　康人
藤田　浩
藤原　郁子
星野　円
堀江　和広
松浦　一恵
松沼　信市
三浦　功雄
美馬　貴志
村山　達哉
谷治　英俊
安間　史子
矢部　香織
山口　弓子
山中ひろ子
山本　薫
吉田　都美
若林　歩
細田　賢治
本多　直子
松木　健造
松村　正明
峰　みどり
向井　克彦
村井　伸夫
茂木　憲司
安田　武史
矢ノ口英里
山際　貴子
山崎　陽来
山中　由光
横山　節子
吉田　明弘
渡辺　泰成

【法人・団体・グループ】

㈲天野商事
㈱木村洋行
クレディー・スイス証券㈱
シティグループ・ジャパン・ホールディングス㈱
しののめこども園　募金箱
鶴川シオン幼稚園
東京ワイズメンズクラブ
東京北ワイズメンズクラブ
東京八王子ワイズメンズクラブ
東京YMCA ES交友会
東京山手YMCAリーダーOB会
日本基督教団　中渋谷教会
日本基督教団　経堂緑岡教会
日本基督教団　霊南坂教会
日本基督教団　霊南坂教会教会学校
野村ホールディングス㈱
公益財団法人原田積善会
ビザ・ワールドワイド・ジャパン㈱
㈱富士メンテサービス
北京基督教青年会
公益財団法人　毎日新聞東京社会事業団
横浜市立南希望が丘中学校職員一同
山中家族キャンプ
第30回　山中湖音楽村
山梨英和中学校・高等学校90周年記念チャリティーコンサート

すべての人を一つにしてください

幸せは「仕合わせ」

「よろこびが集まったよりも、悲しみが集まった方が、しあわせに近いような気がする、強いものが集まったよりも、弱いものが集まった方が、真実に近いような気がする、しあわせが集まったよりも、ふしあわせが集まった方が、愛に近いような気がする」（星野富弘）

鉄腕アトムで有名なマンガ家、手塚治虫のライフワーク「火の鳥」では不死鳥（火の鳥）の生き血で不老不死を手に入れようと「永遠の生命」を求めてドラマが展開します。主人公のマサトが永遠の命を得て、途方も無い時間をたった一人で過ごす中で苦しみます。長寿は私たちの願望として常に存在しますが「永遠の生命とは・幸せとは」の問いを投げかけている作品です。

NHKテレビの白熱教室で「幸福学」がテーマとなっています。ハーバード大学のエリザベス・ダン教授は幸せになるために必要な3点を①人と交わること②人に親切にすること③ここにいること（今を大事に）、としています。「幸せ」は「仕合わせ」とも書きます。仕え合うことです。

人間に与えられた能力（タラント）・機能には隣人のために尽くす（与える喜び）機能があります。機能が十分に発揮・活用されたとき「機能快」という現象が起き、幸福ホルモンが分泌されるのです。ダン教授は「他人の為にお金を使うことで幸せになる」とも言っています。幸福のキーワードは隣人なのです。

イエスの教え・聖書は幸せの処方箋なのかもしれません。星野富弘さんは幸せよりも愛に近づこうとしています。仕え合うことは愛することです。

（総主事　廣田光司）

発達障がい児支援　講演会

障がいによらず　快適な授業を
教育にもユニバーサルデザイン

発達障がい児の支援をしている「ＡＳＣＡ（アスカ）クラス」が1月26日、「つまずく子どもを支える環境の作り方　～一人ひとりが活躍するためのユニバーサルデザイン～」をテーマに講演会を開催。明星大学准教授の小貫悟先生から、たくさんの具体例を学びました。

「ユニバーサルデザイン」とは「バリアフリー」の考えをさらに広げた考え方で、障がいの有無に関わらず、すべての人にとって役立つ工夫です。小貫先生には、「ユニバーサルデザイン」の視点を活用した教育現場での取り組みについてお話いただきました。

現在、学校の通常学級には発達障がい（ＬＤ・ＡＤＨＤ・高機能自閉症）の可能性があり特別な支援を要する子どもが６・５％いると言われています。こういった特徴を持つ子どもは、周囲の環境から影響を受けやすいことが分かっています。そうした子に別教室で授業を受けさせるなど特別な配慮をするのではなく、学級環境や指導方法そのものを工夫することで、すべての子が参加しやすい学校・わかりやすい授業にするというのが教育のユニバーサルデザインです。

たとえば、黒板の周りに余分な掲示物を貼らないようにすれば、子どもたちが注意散漫になるのを防ぐことができます。あるいは授業の流れをあらかじめ伝えておくと、どの子も見通しをもって不安なく授業を受けることができます。

専門的な言い方をすれば、時間や場所の区切りを作ること（＝時間や場の構造化）です。「この課題は○時までですよ」と、時間の区切りを明確に示すこと。「これはここにしまいましょう」と場のルールを明確に示すこと。こういった工夫によって、どの子にとっても分かりやすい授業を作ることができます。また普段の生活も、こうしたちょっとした工夫によって過ごしやすくなります。

会場からの質問では、「こういった工夫や支援を行うことで、子どもが自分で考える力を伸ばせなくなるのでは？」という疑問がありました。しかし小貫先生は、「学校とは、こうすると成功するんだということを学ぶ場所」であり、その成功経験があれば「社会に出てつまずくことがあっても、学校でうまくいった方法を思い出して今度は自分自身で環境を作っていける」ともお話いただきました。

大変有意義な時間を持てました。ありがとうございました。（ＡＳＣＡクラス講師　●●●●）

聖路加国際病院・ＹＭＣＡ
プロ選手がフットサル指導

「聖路加国際病院・ＹＭＣＡぐうぐうフットサルプログラム」が2月16日、東陽町センターを会場に行なわれました。このプログラムは、聖路加国際病院の松井瑞子医師（形成外科）の小児患者とその家族を対象とし、一昨年からサマーキャンプ、クリスマス会などを年に数回実施しているものです。今回は元日本代表サッカー選手の金田喜稔氏（日本サッカー名蹴会から派遣）と、石田美穂子氏（元なでしこリーグプロサッカー選手）にご指導いただき、フットサルに挑戦。子ども21人、保護者、ボランティアなど総勢50人が約２時間、ボールに触れる楽しさを体験しました。

協賛はビザ・ワールドワイド・ジャパン株式会社。また、日本青年会議所と日本サッカー名蹴会にもご協力いただきました。感謝申しあげます。

（会員部　村上祐介）

（右から）金田喜稔氏、松井瑞子医師、石田美穂子氏

フットサルを日本に紹介したのはＹＭＣＡです

フットサルを日本に初めて紹介したのは、札幌ＹＭＣＡの海老沢義道元総主事だということをご存知でしょうか。海老沢元総主事は1956年から5年間、南米派遣主事としてブラジル・サンパウロＹＭＣＡに赴任し、南米にＹＭＣＡ運動を広めました。その折に室内サッカーを観てその面白さに着目。帰国後、冬期はサッカーができない北海道で、この普及に努めました。

東日本ＹＭＣＡ少年少女水泳交歓会
323人、力いっぱい泳ぐ

第32回東日本ＹＭＣＡ少年少女水泳交歓会が2月11日、東京ＹＭＣＡ東陽町センターで開催されました。

選手宣誓を努めた、東京ＹＭＣＡ東陽町センターの長谷川　公君（中1）と、藤倉　空（そら）さん（小6）

大雪が残る中、横浜・埼玉・東京の３つのＹＭＣＡから、昨年度よりも60人多い323人の子どもたちが参加。朝８時前のウオーミングアップから夕方５時前の閉会式まで、元気に日ごろの練習の成果を発揮しました。

今回は初参加の子どもたちも多くいましたが、緊張の中、仲間やリーダー、保護者からの声援を受けて最後まで自分の力を出し切っていたと思います。

会の運営は、各ＹＭＣＡのスタッフ28人とボランティアリーダー39人の活躍に支えられ、全ての競技が無事に行なわれました。終了後には、早くも次の全国ＹＭＣＡ少年少女水泳大会への参加を希望する子どもたちも見られました。今後の練習の目標になってくれればと思います。

（東陽町ウエルネスセンター　山田嘉之）

現場リポート

■　新春お餅つきパーティー

江東コミュニティーセンター

江東センターでは1月25日、新春お餅つきパーティを行ないました。これは、子どもたちにもっとＹＭＣＡを楽しんでもらいたいというコミュニティー委員会の願いから、今年初めて企画されたもの。ピアノや体操、定例野外活動など江東センターのクラスに在籍している子どもたちとその保護者約200人が集まり、お餅つきのほか、ボランティアリーダーによる新春遊びのお店屋さんなどを楽しみました。途中、お餅をつく人に「お餅つき募金」をお願いしたところ、約1万円の国際協力募金が寄せられました。最後には東京江東ワイズメンズクラブの鈴木雅博さんが獅子舞を披露してくださったのですが、これには子どもたちも（大泣き？）大盛り上がり！！

なかなか見ることのできない伝統芸能に釘付けでした。普段とは違ったＹＭＣＡを楽しむ、貴重な時間となりました。

（江東センター　西嶋健太）

■　陽春の集い

東陽町コミュニティーセンター

恒例の「陽春の集い」が2月15日（土）、東陽町センターで開催されました。これは東陽町コミュニティーセンターが、地域の高齢者サービスプログラムとして行っているもので、毎年多くの方にお楽しみいただいています。

今年は前日からの大雪のため、開催が心配されましたが、106人が参加。32人のスタッフ・ボランティアも、交通機関が乱れる中で何とか到着し、雪かき、餅つき、会場の設営にと、汗びっしょりになって奮闘しました。

おかげさまで、つきたてのお餅は大好評！　第2部には、松鶴家千とせ師匠が登場し、「わかるかな？　わかんねぇだろーなー」の漫談で会場は大笑い。最後は「歌の会」で大合唱し、皆さん積雪にもかかわらず、明るい表情で帰宅されました。

（東陽町センター　草分俊一）

東京ーフロストバレーＹＭＣＡ便り

子どもの性的虐待を防ぐために

アメリカでは、女の子の４人に１人、男の子の６人に１人が18歳までに性的虐待を受けているという悲しい現実がある。その内、９割は知り合いによる虐待だという。一方、日本では厚生労働省の統計を見ると、虐待相談件数のうち、性的虐待は年間1500件に留まっている。しかし子どもが虐待を認識できなかったり、被害が身体に残りにくいなど様々な要因により、数値は氷山の一角と指摘する専門化もいる。虐待のない世の中へするためにＹＭＣＡでできることは何だろうか考えさせられる。

そんな中、フロストバレーＹＭＣＡでは昨年より「ダークネス　トゥ　ライト（Darkness to Light）」という団体と協力して、性的虐待を防ぐための運動を展開している。ワークショップでは性的虐待についての、予防策、見抜き方、解決方法など２時間半に渡り行なわれ、修了者へは受講証が発行される。昨年末までに全スタッフが受講した。スタッフの中には講師の資格を持つ者もいて、近隣の学校や消防署などコミュニティーにも働きかけ、2015年までに周辺の方500人へ広めることを目標にしている。

このプログラムは全米のＹＭＣＡでも行われている。ＹＭＣＡが協働することにより900万人の子どもたち、1200万の大人たちへ働きかけることが出来ることになる。このように地域に根ざしているＹＭＣＡとの協働はインパクトがあり、多大な影響を与えることができると評価されている。北米ＹＭＣＡでは「青少年の育成、健康的な生活、社会的な責任」（For Youth Development, For Healthy Living, For Social Responsibility）を標語にしており、コミュニティーの課題に取り組むこと、子どもたちを守ることは、ＹＭＣＡの使命を達成する上で欠くことができない。国際的青少年団体のＹＭＣＡが持つ力を改めて感じている。詳しくは、「ダークネス　トゥ　ライト」のウェブサイト（http://www.d2l.org/）へ。

（在フロストバレーＹＭＣＡ　星住秀一）

心が豊かになる時間　＜研修報告＞

西東京コミュニティーセンター職員　**鳩山　徹郎**

1月29日～30日、東京ＹＭＣＡ山中湖センターで「東日本ＹＭＣＡスタッフ研修会」が開催され、北海道から横浜まで、東日本のＹＭＣＡスタッフ15人が参加した。加えて北海道、仙台、横浜、東京の総主事も参加された。テーマは「ＹＭＣＡの働きとキリスト教」。日頃よりお世話になっている日本キリスト教団早稲田教会の古賀博牧師にご指導いただいた。

「キリスト教入門」と題した1つ目のセッションでは、イエス・キリストの生き方をアンパンマンに例えながら、〝自分のために集める人生〟ではなく、〝他者のために散らす人生〟の大切さをお伝えいただいた。

「ＹＭＣＡで働くとは」と題した2つ目のセッションでは、3人の総主事の思いを聞いた。多くの困難を抱えながらも、エネルギッシュに活躍する総主事の話に心を打たれ、自分を高めていくこと、生き方を強めていく必要性を感じた。最後のセッションでは、ＹＭＣＡスタッフとして、どのように人と人の間に入り、与えられた賜物を磨いて他者のために尽くすのか、その具体的な働きについて考える機会を与えられた。

人が人として生きていく中で必要な価値、にもかかわらず、自分の中にも社会の中にもない何かが、キリスト教の中に豊かに含まれている。だからこそ私自身も、この研修に参加する中で心が豊かになる時間を過ごすことが出来たのだろう。多くのスタッフと共有していきたいと思う。